

研究動向

バラ戦争の評価を巡る近年の研究動向

ティーズサイド大学 A・ポラード

井内太郎(訳)

断りしておく。

訳出することを快諾して下さったポラード教授には、この場を借りて御礼申し上げます。また、同教授の招聘にあたって、日本学術振興会による資金援助を得たことを付記しておく。

はじめに

私がバラ戦争に関する最初の小さな教科書を著したのは一九八八年のことであり、その後、二〇〇一年に第二版を出版した。第三版の出版を予定しようとする場合には、当然のことであるが、現在、その後に出版されたバラ戦争に関する研究書を整理し、さらにこの問題に関する解釈がいかに変化してきたのか、その研究動向をまとめていくところである。

【解題】本稿は二〇〇三年一〇月二六日に開催された広島史学研究会大会の西洋史部会におけるアンソニー・ポラード教授の研究発表を訳出したものである。原文には、当日の発表原稿にポラード教授が手直しされたものを用いた。ポラード教授は一五世紀後半のバラ戦争期、リチャード三世期研究の泰斗であり、さらにイギリスの「一五世紀学会」においても指導的な役割を果たしている。その意味で、同教授によるバラ戦争に関する最新の研究動向に関する報告を訳出することは、今後のわが国の中世イギリス史研究にとっても、大変に有意義なことであるといつてよからう。なお、読者への便宜をはかるため、本文中に訳者による章・節の番号と題目を付している。大会当日は、井内が司会・通訳をつとめ、研究会形式で行われた。しかしながら、報告に対する活発な質疑・応答は、紙幅の都合上、割愛せざるを得なかったことを、お

そこで本稿では、近年の研究のうちいくつかの重要な研究を取り上げながら、バラ戦争期に重要な位置を占めた人物の評価、バラ戦争の契機、その間に用いられたイデオロギーの果たした役割について検討してみたい。

ある意味で、このような作業は非常にやっかいなものと言える。周知のように、これまでのバラ戦争に関する一般的评价は、全くの無秩序と混沌の時代というものであった。それは当時の敵対する勢力同士がプロバガンタとして受け入れた評価であり、一世紀後にはW・シェイクスピアにより人々の心の中に深く銘記されることになった。近年の研究では、これが事実と反するものと広く主張されるようになっていくが、そのような議論自体は少なくとも今から約八〇年前のキングスフォード (C.L.Kingsford) の研究まで遡ることができ。しかしながら、今日においてさえも、かつての誤った解釈は依然として命脈を保っており、ある場合には、より正当な解釈を行うことを求められる人々によっても、主張されているのである。たとえば、一九九九年にデーヴィス (N.Davies) は、ベストセラーとなった概説ブリテン史において、一四五五〜一四八五年にかけてランカスター家とヨーク家との間で生じたバラ戦争が、イングランドを混乱状態に陥らせたと言明している。今年、ロイヤル・シェイクスピア・カンパニは、次のような謳い文句を押し立ててリチャード三世の新たな上演を開始した。「この偉大なる演劇は、権勢を奮う一人の悪党の刺激的な人物描写にとどまりません。バラ戦争の終焉、

最も血なまぐさい権力政治の終焉の歴史的証でもあるのです」。

バラ戦争が長引く内乱の時代であった、しかし。人々の血が大地をぬらした、しかし。けれども、近年の歴史研究は、そうした歴史的评价を乗り越えようとしているのである。

一 主要な人物の歴史的评价

まずバラ戦争の主要な登場人物として、ヘンリ六世、アンジュ家のマーガレット、キング・メーカーのウォリック (Warwick the Kingmaker)、エドワード四世、そしてもちろんリチャード三世に関する最近の評価について概観してみることにしてしよう。典拠については、末尾の参考文献を参照して頂きたい。

① ヘンリ六世

彼の評価を巡る近年の研究は、この不運な国王をこれまで考えられてきた以上に、さらに取るに足りない人物として描こうとしてきた。一九九六年にワッツ (J.Watts) がヘンリ六世治世に関する書物を出版するまで、次のような見解が広く認められていた。成人してはまだ健康な状態にあった国王(一四三七〜一四五三)は、確かに政治的能力には欠けていたかもしれない。しかしながら、彼の顧問官たちが実現を目指していたフランスとの和平締結を、漠然とではあれ彼が支持していたことは、政治にある程度の影響を与えたとし、また彼の

無能さや政治的現実からの身勝手な逃避が、国内問題への対応を混乱させる要因になったとするものである。

これに対してワッツは、次のように主張する。すなわち、彼はいかなる影響も及ぼさなかったし、成人して健康な状態にあったといつても、実際には国王とは名ばかりのものであった。すべての事柄、それはイートン・コレッジの創設でさえも、彼の名のもとに行われたとは言いながら、実際には彼の意向などにおかまいなく、彼の顧問官たちにより遂行されていたのである。

さらにワッツは、次のような指摘も行っている。すなわち、政治的階級、貴族、高位聖職者たちは、公共善(the public good)の維持にかなり精力的に関わっていた。彼らは自らの利害に殆ど関心を示すこともなく、国王の名の下に王国内の政治的空白を埋め安定した統治を復活させるべく奮闘しており、それはまるで国王が実際にあつて権力を行使しているかのように見えた。結局のところ、そうした試みは長持ちしなかったものの、全体として見た場合、それが一時的にはあれ成功した点をワッツは強調するのである。カーベントは、このテーマで書かれたワッツの博士論文を審査した人物でもあるが、彼女もバラ戦争に関する著書の中で、彼の主張をほぼ全面的に繰り返している。

率直に言つて、彼らの見解は受け入れがたいものである。ヘンリ六世に関わる問題とは、いかに弱々しいものであつたにしても、彼が自らの意志を持つていたことに由来している。

したがつて、この脆弱な権力者と彼の廷臣や顧問たちとの間の相互関係が、修復不可能なまでにこじれてしまった点こそが問題なのである。もちろん、国王や顧問たちに加えて廷臣たちが、彼ら独自の目的を有していたことも考慮せねばならない。とはいえ、ワッツは当時の状況を詳細に再現しており、特に一四四〇―一四六〇年の政治の仕組みについての説明においてそれは際だつている。逆説的に聞こえるかもしれないが、この時期の国王評議会に関する史料の残存状況が比較的良好なため(多くの政治的問題の処理が評議会を通じて行われたことからすれば当然のことであるが)、それに基づいて中世のどの時代と比べても、多くの出来事が明らかとなつている。しかしながら、そうした史料からは、彼とは別の解釈も可能なのである。

② アンジュ家のマーガレット

解釈の相違は、マウラー(H. Mauer)のマーガレットに関する新著のなかにも明確に表れている。二〇〇三年になつてはじめて「フランス生まれの強欲な女」という支配的なイメージに対して本格的な反論が行われたこと自体、驚くべきことであろう。マウラーは彼女が女性であつたという点を十分に考慮しながら、これまでよりも繊細かつ慎重に彼女を描写している。王妃としての彼女の役割、また同時に女性が権力を行使することなど考えられなかつた世界にあつて、女性でありながら独自の行動を自由に取ることができた点が、彼女の政治的行動ならびにそれらへの反響を理解する際の鍵とな

る。彼女はもともと政治の世界に巻き込まれることに躊躇していた。しかしながら、生来の自己主張の強い性格から、彼女は自分の子供をもうけた頃から夫の代理を務めるようになっていく。それは基本的に一四五三年以降のことであり、ワッツがヘンリ六世についての記述をはじめめる時期とも重なっている。

マウラーの解釈によれば、マーガレットは一四五八年についてに宮廷派の首領として君臨し、ついにはヨーク派と激しく対立することになった。しかしながら、その様な事態は彼女の本意ではなかった。もともと彼女は和平の調停者となるよう努力していたし、また以前から機会さえあれば、女性としての自分本来の役割へ復帰する意志を表明する心構えはできていたのである。したがって、彼女は自分の夫に代わって国王権力を行使しようとする立場と、王妃として振る舞うことを期待された女性としての本来の立場との狭間に身を投じた女性であったということになる。そこにはいくぶん悲劇的な要素も含まれている。それは人々の心に訴える同情心あふれた読み方ともいえるだろう。しかしながら、マウラーは、マーガレットを政治抗争の犠牲者として捉えようとはしていない。彼女の著作が一四六一年までを扱った研究にすぎないことに注意すべきである。そのため彼女はマーガレットの後半生に関して十分な分析を行っておらず、この点には失望を禁じ得ない。さらにマーガレットが実際には政治抗争の犠牲者であったというもう一つの伝統的な歴史解釈について、彼女

が十分な検討を行っていないことも残念な点である。つまり彼女の見解は、結局のところフェミニストの見解とは言い難いのである。

③ ウォリック伯

ヒックス (M. Hicks) は、事実上のキング・メイカーであったウォリック伯に関する研究において、従来とは異なる歴史の見解を打ち出している。すなわち、彼はウォリック伯が能力にも、信義にも欠ける二人の王に対処することを余儀なくされた貴族の代表格であったと主張するのである。これまで、飽くことを知らない野心に取り憑かれた人物という彼のイメージがずっと定着していたことからすれば、このような新たな見解が生まれたことは喜ばしいことである。ウォリック伯は、一四五六年以降に頭角を現しヨーク派の中心人物に登り詰めていく。彼はヨーク派の中で父親の影が薄くなるほど重要な位置を占め、ヨーク家をそれまで以上に残忍な手段を用いる方向へと突き動かしていった。一四五〇年代後半ならびに一四六〇年代に彼は恥も外聞も捨てさって、何とか世論を自分たちの側につけようとやっきになっていた。海軍力を増強するかれの手腕は大したものであった。一方で政治を血なまぐさいものにしてしまったのも彼である。しかしながら、彼はイングランドの外交政策の転換を予見できるだけのヴィジョンを持っていた。また(ロス氏が描いたような)野望や憎しみではなく、不確実性と不安定性とにより突き動かされた人物という、従来とは異なる伯爵像も明らかになっている。

すなわち彼には直系の男子相続権者がいなかっただのために、彼の有する巨大かつ複雑な相続財産の後継問題に不安定性と不確実性が生じてしまったのである。つまるところ彼の最大の政治的動機とは、いかにして生き残るかということであり、そのために彼はエドワード四世を見限ったというわけである。確かにその可能性もなきにしもあらずである。しかしながら、同時に次の点も忘れてはならない。すなわち彼の側についた爵位貴族や当時の高貴な人々は、彼が民衆暴動を政治的秩序を脅かしかねないところまで扇動しようとしたことに危険を感じ、彼をやっかい払いしてほっとしたのである。

④ エドワード四世

エドワード四世の評価に関しても、二つの伝統的な歴史的解釈が存在している。一つは、クロウランド年代記作家やモアらによって伝承されてきた解釈、すなわち指導力がある有能な君主像と、もう一つは、コミーヌ〔訳注・フランスの歴史家、一四四六?—一五二一年、フランス国王の重臣、「回想録」を著した〕の見解に代表される、浅はかなブレイボーイという君主像である。カーベントは、彼を偉大な国王と評価する。彼女は、彼が中世後期において最も偉大な国王であり、場合によっては、ヘンリ五世よりもさらに偉大であったかもしれないと指摘している。ヒューズは、その著書の中で、当時のエドワード四世像が、彼の治世が進むにつれて変化していく様子をより踏み込んで論じているが、だからといって彼をことさらに持ち上げる誘惑には禁欲的である。まず、鍊

金術師や占星術師らによる予言を通じて、ヘンリ六世時代に生じた混乱状態を收拾し、新たな時代の幕を開く国王というエドワード像が現れる。その後、彼の治世の最初の十年間に生じた試練の時期に、彼こそ古来の王にして将来、再来すると信じられていたアーサー王と見なされるようになる。最後に一四七一年に復位して以降、アウグストゥス、カエサルがモデルとして利用され、この古典古代の政治家のように、彼は今まさに王国の再統合を行おうとしているというイメージが創造された。これらのエドワード像に共通することは、彼が国内の様々な傷を癒し、内乱を治める人物として描かれていることである。ヒューズは、エドワードが実際にそのようなことを行ったわけではないと主張する。しかしながらカーベントは、それらは彼の功績であったと論じている。ヒューズはエドワードの実像を、怠惰で放蕩にしてうぬぼれ易く、無能な人物と評価しているが、こうした見解には私も、ある程度まで共感を覚える。

⑤ リチャード三世

おそらく、近年のバラ戦争に関する研究の中で、最も大胆な評価の見直しが試みられているのは、ジョーンズ (M. Jones) の新著においてであろう。この本はボズワースの戦いを扱っているように見えるが、実際には主にリチャード三世に関する研究書である。これまでの国王リチャード三世像に関して、他言を要すまい。まずジョーンズは、当時、エドワード四世が非嫡出子であるという噂が、十分に根拠のある

疑惑と考えられていたという前提に立つて議論をすすめる。リチャード三世は父親に対する固着観念 (father-fixated) を有した人物であり、自らをヨーク公リチャードの正当なる直系とし、また同公の功績を正当化しようとした人物として描かれる。このようにしてリチャード三世は自らの王位継承権を正当化したのである。もともと彼の家臣の大半は、そのような彼の言い分を認めていなかった。ジョーンズによれば、ボズワースの戦いは、彼の王位継承が正当なものであることを顕示し、ある意味では、神によつて裁いてもらうために行われたものであった。彼の見解は刺激的であり、それゆえに議論の余地がおおいにある。しかしながら、実際の戦闘は違った場所で行ったという彼の二つ目の主張が、もつと喧しい論争を引き起こしたために、この議論の重要性はかき消されてしまっている。

ジョーンズがいかに、われわれを通説とは異なる方向へ誘おうとしても、ヨーク公爵夫人シシリーの浮気事件に関する記述は信じがたいものである。その噂話が一四六一年までに世間に広まっていたことは認めるにしても、同時にヨーク派の側も、アンジュ一家のマーガレットの息子である、もう一人のエドワードの父親がヘンリ六世ではないという風評を流していたことを忘れてはならない。つまり、これは売り言葉に買い言葉であつたように思えるのである。

しかしながら、リチャード三世が、それらの話が真実だと信じるようになり、その意味では彼の行動はジョーンズの議

論に沿つて説明できるようにも思われる。だからといって、これが彼を正統な王位継承者にするほどの説得力を持つものではなかつたことは、言うまでもなからう。結局のところそれは、彼がただの王位篡奪者であるだけでなく、みなに欺かれた悲しき篡奪者であつたことを物語っているのである。

二 バラ戦争の契機

バラ戦争の研究において、人物像を巡る論争は、いまだに主要な論点であり続けている。しかしながら、バラ戦争の研究は、果たしてそれだけで説明がつくような問題なのだろうか？ 内乱や一五世紀半ばにそれらを引き起こした政治的問題は、大義 (Principle) やイデオロギーに加えて、もつと長期的な社会的、政治的要因により生じたとは考えられないのだろうか？ カーペントは、中世の政治において鍵となるのは、国王や彼の主要な臣下たちの動向であり、国内の秩序の安定を左右するような、もつと根深い構造的な要因などではなかつたとして、従来の見解を繰り返している。「バラ戦争」と題された彼女の書物において、その可能性は全く葬り去られているのである。

しかしながら、近年の研究の論点は、彼女の解釈とは全く反対の方向へ向かっているとみてよいであろう。デイヴィスは、ヘンリ五世が残した負の遺産の重要性に改めて目を向けさせる。すなわち、ヘンリ五世は対仏戦争に本格的に関わつ

だが、その結果として一四五〇年までに残ったものといえは、屈辱的な敗北と返済不可能な膨大な負債であった。悪いことにこの負債を返済することは、一四四〇年以降にイングラント(そしてヨーロッパも)が深刻な経済不況に見舞われたために、さらに困難な状況に陥ってしまった。ハッチャーとブリトネルも指摘するように、こうした状況は、大地主たちの財布を直撃しただけではなかった。直接的には土地収入、間接的には課税収入や関税収入の落ち込みにより国王にも大きな財政的打撃を与えたのである。そのため一五世紀末までに国王は深刻な財政問題を抱えることになった。国王が誰であれ、また彼にそれを解決するだけの能力が備わっていようといまいと、こうした危機を免れることはできなかったであろう。その最大の危機とは、ストロームが言うところの、ランカスター家の王位継承権の正統性を巡る根本的な問題であった。ベネット、グロス、ストロームらは、いずれもヘンリ六世の王位継承権の正統性がいかに脆弱なものであったかという点に再び注意を喚起する。この問題が一四五〇年代に彼の統治を揺さぶる火種となり、最終的に掘り崩していったのである。国王がもつと有能であれば、このような事態には至らなかったかもしれない。とまれ、このような事態が、ヘンリ自身の心身の状況をさらに悪化させることになったのである。

これらの問題は、カーペンタの提起した議論、すなわちイギリスの政体 (polity) が、長期的な変化を経験したのか否か

といういまだ未解決の論争に関わるものでもある。問題の核心部分は、果たして一四世紀半ば以降の諸変化が王権を強化したのかあるいは弱体化させたのかという点であろう。

エドワード三世の政治的影響力の強さは、バラ戦争の時代に入ってもなお称賛されていたが、彼はすでに彼の重臣たちに権力を委譲し、彼の向こう見ずな外交政策を遂行するのに彼らの援助を頼もうとしたのだろうか？あるいは彼は王国の統治に彼らをより深く関わらせることで、国王政府の活動領域を拡張しようと考えたのだろうか？しかしながらこれらの議論は厳密な意味において、相互にオータナティヴな議論になつているとは言い難い。すなわち、一方で多くの点において、貴族たちはそれぞれのやり方で国王からの自立性を高め、国王にとって潜在的な脅威となつていったといえるだろう。しかしながら他方で、わけても一四世紀半ばに王国全体を覆った深刻な社会的、経済的危機への対応の結果として、王国の統治は複雑化していき、国王が介入すべき領域が拡大していったこともまた事実なのである。このように肥大化した統治業務をうまく運営するために、次第にそれらの職務が国王の臣下へ委任されるようになった。中でも注目されるのは治安判事たちであり、彼らの職責はこの時期により重要性を増していくことになる。これは複雑な問題なので、これ以上踏み込む必要はないであろう。いずれにしても、バラ戦争に関するわれわれの理解からすれば、この問題は次のような意味を持つてくるように思われる。一五世紀半ばまでに王権の

活動領域が複雑性を増したため、その分、国王の果たすべき業務量も多くなつていった。したがって、この時期に国王になるということは、二世紀前の国王と比べると、より困難な問題を抱えることを意味していたのである。この問題を一五世紀半ばの王権の抱えていた政治的問題に加えてみると、果たしてこのような情勢のもとで国王がトラブルから全く免れている状況などあり得たのかという疑問が、もつと現実味を帯びてくるであろう。

三 イデオロギーの果たした役割

そこからさらに、次のような疑問が浮かんでくる。すなわち一五世紀半ばに臣民たちは国王に何を期待していたのか、また当時いかなる大義 (Principle) やイデオロギーが存在していたのかといった問題である。つい最近まで多くの歴史家たちが、バラ戦争を権力闘争、個人の利害の追求がいかに行われたのかといった視点から研究を進めてきた。どれほどそれが血なまぐさい権力争いであつたかを描いたとしても、権力闘争に関する研究であることに変わりはない。そのような傾向が根強いのは、外交政策、対仏戦争、騎士の名誉の問題が常に念頭に置かれてきたためであらうと思われる。しかしながら、すでに議論した研究書のいくつかは、バラ戦争の研究の議論の幅を広げようとしている。ワッツ (Watts) は、次のように指摘する。国王が自立的な意志や権威を持つことの

重要性は、当時の「君主の鏡 (the mirror of princes)」と称されるジャンルの文学の中でも強調されていた。しかしながら、ヘンリ六世の心神喪失により生じた王権の空白状態の中でそれらが失われつつあつたため、王国内の主要な家臣たちは、それらを支えようとする高尚な志を持つていた。マウラーはステレオタイプ化したジェンダーの問題に注目する。確かに女性が統治することはかなわなかつたが、それでもなお、アンジュー家のマーガレットは、その方法を見いだそうと画策していたのである。ヨーク派が彼女を非難する際にも、彼女がフランス出身であつたというよりも、むしろ彼女が生来のジェンダーの役割を逸脱した点に重きが置かれていたというのが彼女の主張である。つまり彼女はまずどん欲な女であり、その上フランス生まれであつたというわけである。ヒックスは、貴族の模範というウォリック像が、彼自身によつてあるいは他の人々によつていかに作り上げられていったのか、その方法に注目している。ヒューズはエドワード四世の顧問官たちが彼の王権を強化し正当化するために、あらゆる資料を駆使して再生や復古の思想を引き出し、それらを利用してしようとしていた点を描いて見せた。ワッツが「理念、大義、政治」に関する彼の論文の中で論じたように、政治的リーダーたちが、そのイデオロギーが政治的に重要であると声高に唱えたとしても、彼らの行為が、それによつて束縛される必然性はなかつた。大義により彼らの行為を正当化しようとする、まさにその行為が、そうした大義が社会に広まつてい

たことを物語っている。彼らがそれらを積極的に利用しようと考えた理由は、他に見あたらないであろう。

中でもひととき注目を集めた当時の議論は、コモン・ウィール (Common Weal) に関するもの、つまりいかにしてそれを確保するのが最良の方法かを論ずるものであった。一四五〇年頃から、この言葉は政治的に利用されるかたちで広まっていった。コモン・ウィールの中には、それを増幅させ維持することは、国王の義務であるという理念が含まれていた。もとより、この概念は社会が秩序や身分を基礎とする社会であるという信念に基づいており、そのような社会では、人々はみな自分の身分や階層を自覚しており、それに応じた社会的貢献をなすことでコモン・ウィールに関わっていたのである。当時の社会には統治する人と、働く人が存在していた。しかしながら、社会を構成する人々はいずれも、責任と同時に権利を有していたのである。その意味で、当時の社会は共産社会 (communarian) のような性格を持っていたといつてよいであろう。一四五〇年代の社会は無秩序状態にあるというのが、当時の一般的見方であった。なぜそうなったのかについては、諸説があった。一つは国王が病床の身にあり、そのため社会まで病気になるってしまったのだという考え方である。したがって国王が健康になれば、社会も健康になるという期待感もあった。グロス (Gross) はヘンリ六世を手助けするために、なぜ錬金術師が登用されるにいったたのかについて検討している。錬金術師たちに関してはヒューズも言及してお

り、彼らはエドワード四世を特別な霊力により病気を治す治療者として持ち上げていたと主張する。他にも騎士道を重んじ鍛錬することを怠った貴族たちにこそ、社会を混乱させた責任があるという意見もあった。したがって、エドワード三世、あるいはエドワード一世、アーサー王らが活躍した黄金時代に社会が復帰すれば、すべては良い方向へと進むというわけである。

しかしながら、これよりも遙かに大きな研究課題が残っている。果たして臣民はコモン・ウィールの復活を国王に求めたのだろうか？ おそらくウォリックに圧力をかけられていたヨーク公は、コモン・ウィールを守るための忠君的な反抗も場合によっては必要であるとして、ついには反乱を正当化してしまう。この議論こそ、一四五年と一四六〇年に国王の代理として王国を統治しようとしたヨーク公の試みを思想的に正当化するものでもあった。

これに対して国王側は忠君的な反抗などあり得ず論理矛盾をきたしている、国王への服従は絶対的なものであると反論した。コモン・ウィールの維持を確実にする唯一の方法とは、国王への無条件の服従であるというわけである。その後ウォリックはヨーク派の立場をさらに一歩すすめていく。彼は忠君的な抗議により腐敗の改善ならびに良き統治の復活を実現することができるという庶民院の主張を支持した。この議論はそもそもジャック・ケイドの反乱の際に、彼らの抵抗のスローガンとして掲げられたものであったが、その後、

一四五九年、一四六〇年、一四六九年にウォリックらが政治的
反乱を起こした際に、政治的スローガンとして取り込まれ、
重ねて主張されている。一四六一年以降になると、このよう
な考え方は、王位を篡奪しようとする側の正当化理由として
も利用されるようになった。たとえばウォリックは今やエド
ワード四世を本物の王とは見なしておらず、したがって自分
は反乱を起こしているとは言えないと主張しようとしたので
ある。これは誰が聞いても詭弁であった。ヒックスは彼の著
書『イギリスの政治文化』において、次のように主張してい
る。すなわち、このような議論は、まずウォリック、後にリ
チャード三世を指導者とする改革運動 (Reform Movement)
の中で生じたものであった。その重要性を強調するにしても、
近代的意味での Movement という言葉はこの場合に用いるこ
とには問題があるように思える。とはいえ、ヒックスが王の
権威、王への従属の許容範囲、民衆の抵抗権などについての
基本的な議論が、当時すでに存在していたことを明らかにし
た点は評価されるべきであろう。そのような議論も、ヘンリ
七世、ヘンリ八世時代に表れた王党派的あるいはその後絶対
君主主義と呼ばれる概念により一掃されてしまうことにな
る。とはいえ、これら二人の王が統治を行う際にも、コモ
ン・ウィールを維持することに不断の努力が行われていたこ
とは明らかであり、それはウルジが政治の中心にあつて権勢
をふるっている時期に最高潮に達したのである。

おわりに

二一世紀初頭におけるバラ戦争の研究は、登場人物個々の
評価を巡る議論や論争の域をはるかに超えた段階にきてい
る。個々人の果たした役割は重要であるし、彼らの人格、決
定、行動が最終的にことの推移を決した面を否定するもの
ではない。しかしながら、彼らがいかなる政治的・社会的背景
の中で行動していたのかを問うことも、同様に重要な意味を
持っている。バラ戦争は、イングランドを混乱状態に陥らせ
た最も血なまぐさい権力政治の時代という以上に、様々な意
味を持つ時代であったのである。バラ戦争は長期に渡る政治
的危機と断続的に繰り返された軍事的衝突の時代であつた
が、その間にそれにとどまらない多くの諸力が生み出されつ
つあつた。その契機となつたのが、ほぼ百年間も続いてきた
国王と重臣たちの関係の変化、海外での敗北や国内の経済不
振の影響であり、さらに国王と臣民の間の権利と義務に関わ
る基本的な問題を喚起することになる政治的、社会的秩序に
関係する問題であつたのである。

【参考文献】

- M.J.Bennett, 'Edward III's entail and the succession to the crown, 1376-
1471', *English Historical Review* (1998).
R.H.Brimell, 'The Economic Context', in A.J. Pollard (ed), *The Wars of*

- the Roses* (1995).
- M.C.Carpenter, *The Wars of the Roses: Politics and the Constitution in England, c.1437-1509* (1997).
- C.S.L.Davies, 'Henry VIII and Henry V: the Wars in France', in J.L.Watts (ed), *The End of the Middle Ages ?* (1998).
- A.Gross, *The Dissolution of the Lancastrian Monarchy* (1996).
- J.A.Hatcher, 'The Great Slump', in Britnell and Hatcher (eds), *Progress and Problems in Medieval England* (1996).
- M.K.Jones, *Bosworth 1485: Psychology of a Battle* (2002).
- M.A.Hicks, *Warwick the Kingmaker* (1998).
- M.A.Hicks, *English Political Culture in the Fifteenth Century* (2002).
- J.Hughes, *Arthurian Myths and Alchemy: the Kingship of Edward IV* (2002).
- M.Kekewich and others, *The Politics of Fifteenth century England* (1995).
- H.E.Maurer, *Margaret of Anjou: Queenship and Power in late-medieval England* (2003).
- P.Strohm, *England's Empty Throne: Usurpation and the Language of Legitimation, 1399-1422* (1998).
- J.L.Watts, *Henry VI and the Politics of Kingship* (1996).
- J.L.Watts, 'Ideas, Principles and Politics', in Pollard (ed), *Wars of the Roses*.

(広島大学大学院文学研究科助教授)